清水坂下魔界エリアの巻

修学旅行で京都に行くと必ずと言っていいほど登場する見学場所といえば、鹿苑寺金閣、清水寺といったところでしょうか。実際に観光客も桁違いに多く、外せないスポットと言えるでしょう。

中でも清水寺は、参道の商店街や恋愛成就の地主神社とも相まって、中高生には超人気スポットとなっているようです。ところでこの清水寺から参道を下っていくと、途中で五条坂と清水坂の二手に分かれます。右手の清水坂を下って東大路通りに出たところが清水道交差点、そこから更に進むと住所表示に「轆轤町」なる表記が現れます。これは「ろくろ」と読みます。陶芸の清水焼は有名ですが、そのろくろ引き職人が多く住んでいたことが町名の由来とも言われています。ただ、この町名は江戸時代に付けられたもので、以前は「髑髏町」と呼ばれていました。その読み方は「どくろ」、そう、あのガイコツのドクロのことなのです。

この辺りはその昔、鳥辺野と呼ばれる風葬の墓地でした。風葬とは遺体を通常の火葬や土葬ではなく、自然の中に安置して自然に還す葬儀方法で、空葬や鳥葬とも呼ばれるものです。

都として栄華を誇った平安京は、その人口増加に伴って墓地の確保が課題となっていたようです。芥川龍之介の「羅生門」には、門の上層に打ち捨てられた遺体の毛髪を抜く老婆が描かれますが、葬送の場をどうするかは深刻な問題だったようで、町の外れで、しかもそれほど遠くない所が風葬の場所となりました。鳥辺野は、西の化野（あだしの）・北の蓮台野（れんだいや）とともに三大風葬地の一つとなりました。冥界への入口とされる「六道の辻」の碑があるこの辺りは、京都でも異色の寺社等が集まっています。

六道珍能寺は、公卿である小野篁が冥界(地獄)への往路に利用したと伝えられる井戸があります。小野篁には、昼間は朝廷で官吏を務め、夜間は地獄において閻魔大王のもとで裁判の補佐をしていたという伝説が残されており、境内の焔魔堂には、閻魔大王像の隣に小野篁の像が安置されています。

空也の寺として有名な**六波羅蜜寺**には、教科書にもよく写真が載っている、口から念仏の六字を象徴した阿弥陀仏の小像を吐き出している空也像があります。六体の阿弥陀仏は念仏を唱えるさまを視覚的に表現しています。令和 6 年 11 月には 12 年に一度、辰年の御開帳が行われ、本尊が一般公開されます。

清水道交差点から松原通りを西に進むと、四百五十年以上の歴史をもつ**飴屋の「みなとや」**があります。この店は、亡くなって埋葬された女性が地中で出産して、飴で赤ん坊を養っていたという話が伝わる「幽霊子育て飴」で知られています。この飴は、“命”をつないだ飴として、現在も販売が続けられています。

また、空海がここに建てた地蔵堂が元になったといわれる**西福寺**は、帷子ノ辻の命名の由来となった、檀林皇后の九相図絵が残されています。檀林皇后は修行中の僧侶ですら恋心を抱くような美貌を持っていましたが、皇后はこの状況を嘆き、自分の亡骸は埋葬せず風葬するよう遺言を残しました。朽ち果てていく我が身で仏教が説く諸行無常というものを教えようとしたのです。図絵はそれを伝えています。

このように、六道の辻界隈は京都市内でも他の場所とは違う趣をもつ「魔界エリア」ともいうべき地区となっています。京都の歴史の長さ、それは人々の陰陽明暗を併せもった深い奥行きを感じさせてくれます。